The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	コソアの意味記述と人称 「一人称」と「二人称」は「三人称」か？
Author(s)	瀧田, 恵巳
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2017, 2016, p. 21-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/62073
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

コソアの意味記述と人称

「一人称」と「二人称」は「三人称」か？

瀧田恵巳

1. 問題提起

「これ，この，ここ」などのコの系列，「それ，その，そこ」などのソの系列，「あれ，あの，あそこ」などのアの系列は，「今という時間，そして話し手の今いる場所を中心として，物事を指し示す働きをする語」（金水・木村・田窪 1989:1）であることから「指示詞」と呼ばれる。これら指示詞の説明には，次のように話し手及び聞き手がしばしば含まれる。

(1) 非常に大ざっぱに言うと，コの系列の指示詞は，話し手の近くにある対象を指し示す。アの系列の指示詞は，話し手から遠くにある対象を指し示す。ソの系列の指示詞は，聞き手に属する対象を指し示したり，コやアでは指せない対象を指し示したりする。（金水・木村・田窪 1989:1）

上記の説明は日本語学習者に向けられたもので非常に明快である。だが，改めて人称という観点から考えてみると，ある矛盾に気づく。

話し手を一人称，聞き手を二人称，そしてそれ以外を三人称と呼ぶならば，三つの人称は明確に区別されるはずである。しかし(1)の説明において，コソアの指示詞は話し手及び聞き手以外，つまり三人称を指し示すはずであるにも関わらず，コは一人称である話し手，ソは二人称である聞き手に基づいて説明されている。

さらにコやソの用法をつぶさに見ると，これらは話し手や聞き手を指す場合にも用いられている。例えば「こちらはいつでも結構です」という場合，「こちら」によって話し手を指し示すことができ，聞き手を「そちら」によって指し示しつつ「そちらの意見を聞かせてください」ということもできる（『大辞泉』: 1322, 2140）。

なぜ本来三人称を指すはずのコとソが，話し手や聞き手により規定され，さらに話し手及び聞き手を表す表現へと移行しえるのだろうか。

明治時代のコソアの諸研究においても，人称のとらえ方にはかなりの相違が見られる。

本論文では，2 で古田(1980/1992)が紹介するコソアの諸研究のうちの三つの研究における人称のとらえ方を示し，3 で紹介する Bühler (1934/1982)の言語オルガノン・モデルによって，その相違の原因と冒頭の問題を 4 で考察し，5 でまとめと今後の課題を提示する。

なお自称詞及び対称詞を中心とした人称表現に関する人称区分を言語オルガノン・モデルに基づいて説明する試みは，すでに瀧田(2017)において行われている。本論文は，コソアの意味記述に関する人称ついても同様に言語オルガノン・モデルによる説明が可能であ

ることを示すことにより，このモデルの汎用性の高さを証明することも目的としている。

2. 人称による意味記述とその矛盾

古田(1980/1992)は，佐久間(1983)がコソアドの指示詞を話し手と話し相手との関係で位置づけるまでの経緯として，江戸期から明治までのコソアの諸研究を扱う。これらのコソアの意味記述には，人称に関して大きく二つのパタンがある。それは，コソアを一律三人称とするパタンと，コソアにそれぞれ一人称，二人称，三人称を割り当てるパタンである。

まずコソアを一律三人称ととらえる研究として，田中(1874)が挙げられる。古田(1980/1992:12-14)が指摘するように，田中(1874)は，「私・僕」等を一人称，「アナタ・君」などを二人称，「これ」「あれ」「それ」を三人称の人代名詞とし，距離によって区別する[1]。

(2) 全て三人称とする意味記述：田中（1874：44/50）[2]

此中，第一人称と，第二人称と，詞に差別あれども，其意味に異なることなし。但第三人称は，用法広大なるゆゑに，其意味に各差等あり。仮令ば，コレは，近き所にあるものを示し，アレは遠く隔たりあるものを示し，ソレは，コレと，アレとの，中間にあるものを示すものなり。（____による強調は原典，____による強調は本論文著者による）

一方，コソアに各人称を割り当てる意味記述としては，アストン W.G.Aston によるものが挙げられる。古田(1980/1992:17)は，「コソアドについて，人称と関連付け，さらにその系列の語をまとめて示したのは，アストンである」と指摘する。古田(1980/1992:18-20)によると，アストンは 1872 年（明治 5 年）の A Grammar of the Japanese Written Language『日本文語文典』の初版において，コレ，ソレなどは「指示代名詞」ではなく，「人代名詞」であり，コレは第一人称の代名詞，ソレは第二人称の代名詞であるとし，その翌年 1873 年（明治 6 年）には，A Short Grammar of the Japanese Spoken Language『日本口語文典』の第三版で，ソレ，ソノを第二人称の，アレ，アノを第三人称の指示代名詞であるとする。さらに 1877 年（明治 10 年）の『日本文語文典』の第二版で，コソ（カ）アは一人称，二人称，三人称の指示代名詞として記述される(古田 1980/92:20-22)。

(3) コソアに各人称を割り当てる意味記述：アストン（1877）『日本文語文典』第二版[3]

コ・コレ・コノ：第一人称の指示代名詞 話し手の近くにあると考えられたり，話し手に属したりしている事物をさす

ソ・ソレ・ソノ：第二人称の指示代名詞 話し相手に近いと考えられたり，話し相手に

[1]古田(1980/92:9)によると，コソアの意味を距離によって弁別する記述は，既に富士谷成章（ふじたに・なりあき）の『かざし抄』（明和 4[1767]年）に見られる。

[2] 引用箇所については，http://hdl.handle.net/2309/120742 で公開されている原典の表示に従った。また原典では旧仮名遣いが用いられているが，本論文では便宜上，古田(1980/1992：13)の記述をそのまま引用した。

[3] (3)の引用については，古田(1980/92:22)の記述をそのまま取り入れた。

関係している人や事物をさす

カ・カレ・カノ，ア・アレ・アノ：第三人称の指示代名詞 現に存在していない人や事物をさす

田中(2)とアストン(3)のいわば中間に位置づけられる意味記述もある。

古田(1980/1992:14)が指摘するように，中根(1876)は，コソ（カ）アを人称の区別も性別の区別もない普通代名詞としながら，これらを人称に分けて説明する。しかもその人称は互いに独立したものではない。中根（1876:39[4]）は「人称は，三箇共全くその區別ある者なれ共，是・其を人代名詞に用ふるゐは，文章の場合に由りて，一人称の是を，二人称にも三人称にも用ひ，二人称の其を，三人称にも用ふ」とし，コとソをそれぞれ一人称と二人称の人代名詞としたうえで，コは二人称にも三人称にも，ソは三人称にも用いられるものとする[5]。その結果，コソ（カ）アは全て三人称にも位置づけられる。この意味記述は，(2)の一律三人称とする意味記述と(3)の各人称を割り当てる意味記述の中間と見なされる。

(4) 中間的な意味記述：中根（1876:40）[6]

一人称	是（コ）是（コレ）
二人称	是（コ）是（コレ）其（ソ）其（ソレ）
三人称	是（コ）是（コレ）其（ソ）其（ソレ） 彼（カ）彼（カレ）他（ア）他（アレ）

(2)のように一律三人称とされるコソアは，僕や君のような一人称及び二人称の表現に対立する三人称として捉えられる。一方，(3)のようにコソアを各人称に結び付ける意味記述では，コソアの用法が互いに明瞭に区別されるという長所がある。(4)のような中間的な意味記述は，その両方を取り入れようとしたものであろう。これらの意味記述はそれぞれ理にかなったものではあるが，コソアと人称の関係は一致していない。

人称に関するジレンマは，佐久間（1983）にもみられる。

まず佐久間(1983:3f.)は，コソアドを「代名詞」と呼ぶのは不適当とみなし，その理由としてコソアドは①他に代わるというよりも指し示す機能を果たすこと，②名詞の役割のみではないことを指摘する。その結果，佐久間(1983:13)は，この種の語類を「こそあど」と

---

[4]原典は和本綴じで，本を構成する紙の中央に位置を表示する数字が書かれている。各用紙は中央を山に折られて綴じられているので，本を開くと数字がちょうど本の両側に現れる。従ってこの数字は通常の書籍 2 ページ分の表示である。本論文ではこの数字を引用箇所として表示する。

[5] 中根(1876:39)が挙げる例はいずれも古典的なもので典拠および具体的な説明は記載されていない。だが，この条件を満たす例は随所に記載されている。例えば『新明解古語辞典(第二版)』（三省堂，1980 年出版）によると，「これ」が自称の代名詞として用いられる例としては「これは，一所不住の沙門にて候」（謡・鉢木）が，対称の代名詞として用いられる例としては「笛をふきやめて，立ち返りて『これはいかなる者ぞ』と問ふに」（今昔物語 25 巻）が挙げられている。

[6]中根(1876)はコソアを人代名詞（「真称代名詞」と「仮称代名詞」）と共に並べた表を提示しているが，コソア以外の部分については，ここでは古田(1980/1992:14)による引用に倣って，割愛した。

いう名称で統一し，また「人代名詞」と区別するときに，「指示詞」，「指す語」と呼ぶ（同書 p.13）。
その後，佐久間(1983:19)は，コソアの用法はいわゆる近称・中称・遠称の区別のみでは十全な説明ができないとし，話し手の手の中にあるものを「これ」，相手の手の中にあるものを「それ」と呼ぶ例を挙げたのち，以下のように主張する。

(5) もちろん，これらの単語は，人をさす人代名詞ではなくて，物事をさすのに相違ありませんが，**「これ」という場合の物や事は，<u>發言者・話手</u>の自分の手のとどく範囲，いわばその勢力圏内にあるもの**なのです。また，**「それ」は，<u>話し相手</u>の手のとどく範囲，自由にとれる区域内のもの**をさすのです。**<u>こうした勢力圏外</u>にあるものが，すべて「あれ**（ママ）に属します。
（佐久間 1983:22-23　太字による強調は原典，下線による強調は本論文著者による）

上記のようにコソアの用法を話し手と聞き手に関連づける当然の帰結として，佐久間(1983)は，コソアを三人称とはしない立場をとる。その理由付けは，以下のように，人称とはヨーロッパ語の動詞の変化形に対応するもので，日本語の指示代名詞に適用する必要はないというものである。

(6) 一体この「人称」ということは，ヨーロッパ語法から借用して来たもので，ヨーロッパ語では主格になる語の人称が文の述部となる動詞の変化形と照応しなければなりません。自分をさすものすなわち第一人称，相手をさす第二人称，第三者をさす第三人称の代名詞（人以外の事物をさす代名詞はこれに準じる）に対して，それぞれ対応の動詞変化形が成りたちます。この辺の関係が日本語とちがいます。で，いわゆる指示代名詞をむりに第三人称として取りあつかう必要もなかったわけです。
（佐久間 1983:34）

確かに日本語の動詞には人称に応じた活用は存在しない。しかし人称の区別が可能だからこそ，自称・対称・他称という意味記述が成立するのである。その人称区分を日本語のコソアの名詞的用法に当てはめれば，やはり他称，つまり三人称となる。
以上のように，コソアは全体として三人称ととらえられるにも関わらず，(1)のようにコを話し手，ソを聞き手に結び付けて説明する意味記述は，コソアの意味と用法が容易に互いに区別されるが故に明快である。このように人称に関して概して二分されるコソアの意味記述は，相反しつつ，各々理にかなうという，いわば二律背反の関係にある。

3.　言語オルガノン・モデルとその概要

2 で挙げたコソアの意味記述における人称を分析するには，言語表現を話し手，聞き手，

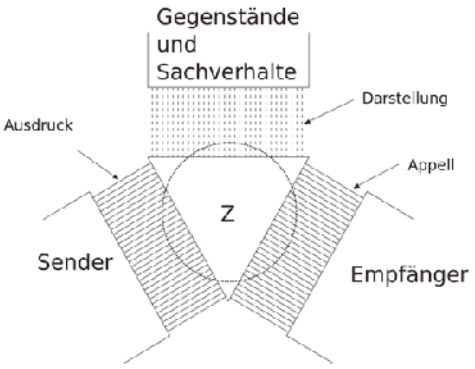
それ以外に関連付ける必要がある。3 ではこれらを構成要素とする Bühler (1934/1982) の「言語オルガノン・モデル　das Organonmodell der Sprache」を導入する。

言語オルガノン・モデルは，元々人称の分析のためのものではなく，記号としての言語の機能を，いわば言語外から，具体的な発話現象における三つの基盤との相互関係として多面的に図式化したもので，あらゆる言語に当てはまることが前提となっている。

言語オルガノン・モデルの成立には次のような背景がある。Bühler (1934/1982:12ff.) によると，最初の象形文字の分析者は，それが言語の文字であり，テクストであると仮定することによってはじめて分析することができた。つまり多様な言語学的観察はすべて，言語の特性を前提にして初めて可能となる。このような言語学的分析を高度に規制する研究理念を体系的に示す必要性から 4 つの公理が提示される。その最初の公理 A が言語オルガノン・モデルであり，その構想はプラトン Platon の『クラテュロス Kratylos』に由来する。Bühler (1934/1982:24f.)は，『クラテュロス』にある「言語はある者にとって別の者に事物について何かを伝える道具 organum である」という言葉を契機に，「ある者」，「別の者」，「事物（について）」を三つの基本的な関連要素として言語を道具とする言語行動モデル，すなわち「言語オルガノン・モデル」を構築する。

図 1　言語オルガノン・モデル das Organonmodell der Sprache

(Bühler 1934/1982:28)(Wikipedia「Organon-Modell」による)



図中の術語

Z(Zeichen):　言語記号

三基盤

Sender:　送り手　　Empfänger:　受け手

Gegenstände und Sachverhalte:　対象と事態

三機能

Ausdruck:　表出　　Appell:　呼びかけ

Darstellung:　叙述

言語行動を行う「ある者」は，「話し手」「主体」等，様々な呼び名があるが，ここでは一律「送り手 Sender」と呼ばれる。「聞き手」に相当する構成要素である「別の者」は，言葉の受け取り手という意味で「受け手 Empfänger」と呼ばれる。言語が表す内容である「事物」は「対象と事態 Gegenstände und Sachverhalte」と名付けられる。中央に位置する「言語記号 Zeichen」には三つの局面がある。点線円の部分は音響的側面，直線三角は記号的側面で，言語記号が送り手にとって「兆候 Symptom」，受け手にとって「信号 Signal」，対象と事態との関係においては「象徴 Symbol」であることを示す。三辺と送り手，受け手，対象と事態をつなぐ直線群は，記号としての言語の働きを表す。つまり記号

は，送り手による「表出 Ausdruck」機能，受け手への「呼びかけ Apell」機能，対象と事態に対する「叙述 Darstellung」機能を果たす。

このモデルの三基盤と三機能はアンバランスである。三基盤の「送り手」と「受け手」が単一要素であるのに対し，「対象と事態」には二つの要素が含まれる。また三機能の「表出」と「呼びかけ」は実線で表示されるのに対し，「叙述」は点線表示である。Bühler(1934/1982:30)によると，「対象と事態」は，事物（Dinge）である対象(Gegenstände)だけでなく，事物間の相関関係たる出来事(Sachverhalt)も含まれるが故に二重表示となる。「叙述」を点線で表示することについては、明確な説明に欠けるが，Bühler(1934/1982:30)は実際の言語記号の音形と事物との間には類似性がなく，過去の類似性も定かではないことを指摘しており，言語記号と「対象と事態」との間接的な関係が示唆されている。

4. 人称に関する考察

4.1. コソアの意味記述における人称の位置づけ

図 1 の言語オルガノン・モデルについて，林(1979 :69f.)は言語行動の見地から，「送り手」を「一人称」，「受け手」を「二人称」，言葉により叙述される内容事物，即ち「対象と事態」を「三人称」とする[7]。これと同じ人称の配分は Tanaka(2011 :35)にも見られることから，この人称の解釈は一般に広く認められると考えられる。以下便宜上，言語オルガノン・モデルの「送り手 Sender」に一致する「一人称」を「一人称 S」，「受け手 Empfänger」に一致する「二人称」を「二人称 E」，「対象と事態 Gegenstände und Sachverhalte」に一致する「三人称」を「三人称 GH」と呼ぶことにする。

この新しい名称の人称を，コソアの意味記述(2)(3)(4)を言語のオルガノン・モデルに照合すると，前提となる人称そのものが異なることが明らかになる。

(2)の田中(1874)のようにコソア全てを「三人称」とする観点は，林(1979)が言語オルガノン・モデルの「対象と事態」を「三人称 GH」として捉える見解に一致する。この場合コソアに対応する「三人称」は「三人称 GH」となる。

(3)のコソアにそれぞれ各人称を割り当てるアストンの意味記述において，「一人称」とはコによって示される話し手に近い領域，「二人称」とはソによって示される聞き手に近い領域である。つまりいずれの領域にも，話し手及び聞き手そのもの，即ち「送り手（一人称 S)」と「受け手（二人称 E)」は含まれていない。従って，アストンのいう「一人称」，「二人称」，「三人称」は，「三人称 GH」の構成要素であり，(3)のコソアの意味記述における人称関係は「一人称」＋「二人称」＋「三人称」＝「三人称 GH」という公式で表示することができる。

(2)と(3)で記述されるコソアの用法には，いずれも話し手と聞き手そのものは含まれてお

[7] 林(1979:70)が掲載している言語オルガノン・モデルは，Bühler, K. (1918):Kritische Musterung der neueren Theorien des Satzes. Indogermanisches Jahrbuch VI, 1-20 に由来するとされるが，確認したところ，この文献に言語オルガノン・モデルは記載されていない。しかしいずれにせよ，林(1979:70)に掲載されている言語オルガノン・モデルは本論文の図 1 に一致する。

らず，全て「三人称 GH」の枠内でとらえることができる。

一方，(4)の中根(1876)は，人代名詞としてのコとソの用法，つまりコとソにより話し手と聞き手を指し示すことを認めている。他方，コソアは全体的に人称の区別のない普通代名詞としてとらえられている。そこで試みとして，まず一人称の人代名詞として話し手を，二人称の人代名詞として聞き手を表す用法を敢えて除外してみよう。さらに「一人称」とされるコは「二人称」と「三人称」にも適用され，「二人称」とされるソは「三人称」にも適用される点にも留意する必要がある。つまりコソアの分布から言えば，「一人称」への適用はコのみに限定され，「二人称」にはコとソ，「三人称」にはコソアすべてが適用される。各人称間の関係は，「二人称」が「一人称」を含有し，「三人称」は「一人称」と「二人称」を含むという抱合関係であり，「一人称」＜「二人称」＜「三人称」＝「三人称 GH」という公式で表示することができる。

しかし，中根(1786)について敢えて除外したコとソが叙述する話し手と聞き手は，果たして「送り手（一人称 S)」と「受け手（二人称 E)」に一致するのだろうか。次節ではこの問題について考察する。

4.2. 一人称と二人称に関するさらなる考察

4.1 で示したように，(2)のコソアの意味記述に現れる「三人称」は「三人称 GH」に一致し，(3)の「一人称」と「二人称」には，そもそも話し手と聞き手そのもの，即ち「送り手（一人称 S)」と「受け手（二人称 E)」は含まれていないことから，「三人称 GH」の一部と判断することができる。しかしその反面，コソアの意味と用法は，話し手と聞き手に結び付けることにより互いに明確に区別される。また冒頭で示したように，「こちら」によって話し手，「そちら」によって聞き手を表すことも可能であり，(4)の中根(1976)も話し手及び聞き手を表すコとソの用法を認めている。

さらに Bühler (1934/1982:144f.)は，現代ドイツ語において一人称代名詞 ich 及び二人称代名詞 du が存在しない場合であっても，例えば体の部位を表す語を用いて，「口」で一人称代名詞，「耳」で二人称代名詞を代用することができると指摘する。また日本語の「僕」「君」の様ないわゆる「一人称代名詞」及び「二人称代名詞」に相当する言葉が，元々普通名詞である「下僕」と「君主」に由来することにも言及している。つまり「僕」や「君」は，「口」や「耳」と同様，もとはといえば普通名詞であり，いわゆる「三人称」に属する。

ここで，冒頭の問題に立ち返ることにしよう。

話し手を一人称，聞き手を二人称，そしてそれ以外を三人称と呼ぶならば，なぜ本来三人称を指すはずのコソアが，話し手と聞き手により規定され，ひいては話し手及び聞き手を表す表現にまで移行しえるのか。

ここで一人称代名詞と二人称代名詞を言語オルガノン・モデルに当てはめてみよう。なるほど一人称代名詞が表す話し手は送り手を指すことから「一人称 S」，二人称代名詞が表す聞き手は受け手を指すことから「二人称 E」に合致するように思われる。だが「私」の

ような一人称代名詞が表す「一人称」，そして「君」のような二人称代名詞が表す「二人称」は，「私」，「君」という言葉による叙述内容であり，叙述 Darstellung の対象である。つまり，言語オルガノン・モデルに基づくのであれば，三人称のみならず，言葉によって表現される話し手（一人称）と聞き手（二人称）もまた「対象と事態（三人称 GH）」という同じ領域に属することになる。

対象と事態に属する「一人称」と「二人称」が，「送り手（一人称 S）」と「受け手（二人称 E）」とは厳密には区別されるという点に関しては，すでに時枝が「主体の客体化」の現象として以下のように説明している。

(7) 主体の客体化（時枝 1941/2007:59）

文法上の第一人称が主体と考えられることがある。成る程，「私は読んだ」という表現に於いて，この表現をしたものは，「私」であるから，この第一人称は，この言語の主体を表している様に考えられる。しかしながら，猶よく考えて見るに，「私」というのは，主体そのものでなくして，主体の客体化され，素材化されたものであって，主体自らの表現ではない。客体化され，素材化されたものは，もはや主体の外に置かれたものであるから，実質的に見て，「私」は前例（「猫が鼠を食う」）の「猫」と何等択ぶ処がなく，異る処は，「私」が主体の客体化されたものであり，「猫」は全然第三者の素材化されたものであるということであって，そこから第一人称，第三人称の区別が生ずる。従って，「私」は主格とはいい得ても，この言語の主体とはいい得ないのである。この様に第一人称は，第二，第三人称と共に全く素材に関するものである。後に述べることであるが，第二人称も場面即ち聴手そのものではなく，聴手の素材化され，客体化されたものであるのと斉しい。この考方は極めて重要であって，かようにして，言語の主体は，絶対に表現の素材とは，同列同格には自己を言語に於いて表現しないものである。

（強調及び括弧内の文「猫が鼠を食う」の補足は本論文著者による）

上記の説明では，「私」という言語表現が表すのは，話し手そのものではなく，表現される素材，つまり言語オルガノン・モデルでは「対象と事態」に相当する。

以上のことを鑑みるならば，そもそも一般的な「一人称」と「二人称」こそが，「三人称」，正確にいえば「三人称 GH」の枠でとらえられることがわかる。ゆえに話し手と聞き手は容易に固有名詞で置き換えられる。また「僕」「君」の様ないわゆる「一人称代名詞」及び「二人称代名詞」が，元々普通名詞，いわば「三人称」に端を発するのはそのためであろう。このように一人称と二人称は，一見三人称とは全く異なるかのように思われるが，言葉によって示される人称は全て「三人称 GH」＝「対象と事態」に属する。かくして「こちら」により一人称を「そちら」により二人称を表すことも可能となる。

言語オルガノン・モデルにおける「一人称 S」，「二人称 E」，「三人称 GH」の区別は，

会話にかかわるものの「送り手」と「受け手」,「それ以外」に相当し，その区別は明快である。一方「対象と事態」内の「人称」間の関係は，元々全て「三人称 GH」であるため，その境界は遙かに曖昧である。三人称 GH における人称の境界のあいまいさゆえに，コソアの意味記述における人称の相違，ひいては(4)の中間的な学説も生じる。だが(3)のようにコソアの意味記述に各人称を割り当てること自体，つまり三人称を一人称と二人称に直接結びつけられるまさにこのことが，これらの人称が同じ領域（「対象と事態」）に属していることを示しているのである。

このように言語オルガノン・モデルにおいて,「対象と事態」内の「人称」，即ち言語記号で表現される「言語内の人称」は，言語記号の外から見た「人称」，即ち「一人称 S」「二人称 E」「三人称 GH」からなる「言語外の人称」からいえば，全て「三人称 GH」に属する[8]。コソアを一律三人称とする際の「三人称」は，言語外の人称であるが故に言語現象及び言語行動の点から見て正当である。一方，コソアにそれぞれ割り当てられる人称は言語内の人称であるが故に，具体的な言葉の使い分けを説明するうえで有用なのである。

5. まとめと今後の課題

コソアの意味記述に見られる人称のメカニズムを，言語オルガノン・モデルに基づいて検討した結果，まず(2)と(3)のコソアの意味記述に現れる「一人称」と「二人称」は，送り手と受け手が含まれないことから,「三人称 GH」に属することが明らかになった。

さらに，いわゆる一人称代名詞と二人称代名詞によって表現される「一人称」と「二人称」もまた，言語オルガノン・モデルから見れば，言語記号によって叙述される内容であることから対象と事態，即ち「三人称 GH」に属することも解明された。「一人称」と「二人称」が同じ領域にあるからこそ，これらは元々「三人称」とされる表現によっても叙述することができる。故に Bühler (1934/1982:144f.)が指摘するように，一人称代名詞「僕」と二人称代名詞「君」が元来三人称である普通名詞に由来することも，また話し手自身を「こちら」と呼び，聞き手を「そちら」と呼ぶという現象も成立するのである。

おそらく，言語オルガノン・モデルにおける「対象と事態」内の人称，つまり言語内の人称と，三基盤に基づく「一人称 S」,「二人称 E」,「三人称 GH」といういわば言語外の人称は，一般には明確に区別されていないといえるだろう。だが，この人称体系の二重構造を把握することにより，様々な言語現象が明らかになる。

例えば，一人称と二人称に対する三人称の始原性は，既に随所で指摘されている。だが，そのメカニズムを明確に提示する試みは，私見の及ぶ限りまだ無い。

また架空の物語はしばしばある登場人物を中心に展開する。作者や読者がその場に居合わせているかのように描写するのであれば，その登場人物は一人称の方が適切かと思われるが，実際には物語の主人公は三人称であることのほうが多い。

---

[8] 「言語内の人称」および「言語外の人称」という名称は，人称と言語オルガノン・モデルに関する寺門伸先生からのコメントによるものである。

こうした現象もまた，本論文で取り上げた「三人称 GH」に深い関わりがあり，言語オルガノン・モデルによる分析と考察の対象であると考えられる。今後の課題としたい。

謝辞

本論文の元となる議論に関して重要なご指摘をくださった二人の先生方，コソアと人称について研究するきっかけと見識の深いご助言をくださった田窪行則先生，人称と言語オルガノン・モデルについて広い観点から大変貴重なご指摘をくださった寺門伸先生に，心より感謝申し上げます。本論文は JSPS 科研費 JP253704300 の助成を受けたものです。

参考文献・ウェブサイト一覧

Bühler, Karl **(1934/1982)**: Sprachtheorie. Die Darstellungsfunktion der Sprache, Fischer, Stuttgart, 1982 (Nachdruck von 1934).（脇坂豊・植木迪子・植田康成・大浜るい子共訳『言語理論　言語の叙述機能　上巻』クロノス，1983，脇坂豊・植木迪子・植田康成・大浜るい子・杉谷眞佐子共訳『言語理論　言語の叙述機能　下巻』クロノス，1985.）

『大辞泉（第二版）**』**小学館，2012.

林四郎**(1979)**:「言語行動概観」, 南不二男編『講座言語第3巻　言語と行動』大修館書店，67-98.

古田東朔**(1980/1992)**:「コソアド研究の流れ（一）」『人文科学科紀要』71（東京大学教養学部人文科学科），119-156. In: 金水敏・田窪行則（編）『指示詞』ひつじ書房，1992，7-31.

金水敏・**木村**英樹・**田窪**行則**(1989)**:『日本語文法　セルフマスターシリーズ 4　指示詞』くろしお出版.

中根淑**(1876)**:『日本文典』，森屋治兵衛出版.

佐久間鼎**(1983)**:『現代日本語の表現と語法（補正版）』くろしお出版.

瀧田恵巳**(2017)**:「人称と言語オルガノン・モデル」,『言語文化研究 43 号』大阪大学大学院言語文化研究科，97-118.

Tanaka, Shin **(2011)**: Deixis und Anaphorik –Referenzstrategien in Text, Satz und Wort— (Linguistik-Impulse & Tendenzen 42), de Gruyter, Berlin.

田中義廉**(1874)**:『小學日本文典 巻之 1-2』, 貙窠書屋, http://hdl.handle.net/2309/120742, 2015/4/21 にアクセス.

時枝誠記**(1941/2007)**:『国語学原論（上）〔全2冊〕』, 岩波書店（底本:『国語学原論』岩波書店, 1941）.

Wikipedia「Organon-Modell」,https://de.wikipedia.org/wiki/Organon-Modell, 2017/4/16 にアクセス.